

Title	井上準之助著 我国の経済及金融
Sub Title	
Author	堀江, 帰一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.8 (1925. 8) ,p.1242(152)- 1246(156)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250801-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

井上準之助著「我國の經濟及金融」

菊版二四六頁、附錄統計表數葉、岩波書店發行、定價金貳圓

堀江 歸 一

本書は歐洲戰爭の末期から、大正十二年震災直後に至る數年間の我國經濟狀態に就て、著者の東京商科大學に於て、試みた講演を筆録したものであつて、曩に公にされた「戰時及戰後に於ける我國の對外金融」の姉妹編若しくは續編と認めることが出来る。右の年間著者は或は日本銀行總裁として、或る程度まで、政府の金融政策に參畫して居り、或は大藏大臣として、震災直後の經濟政策を擔當して居つた爲め、本書に記述する所が盡く事實に立脚して居り、又活氣の横溢する趣きの認められるものはあるが、同時に其議論が多く自己の所爲に對する辯護と爲り、説明と爲る傾きのあるのは、已むを得ないとしても、時に實狀を述べて、足らざるやに思はれる所、關係者に憚つて、立言を半途に止めたと認められる節のあるのは、吾人の物足らぬ感を懷く點であつて、宜しく學生に對する講義と云ふが如き、束縛されたものでなく、著者自ら僞らず、飾らざる告白を試みたならば、更に世間を益することの大なるを信ずるのである。

第一章に於て、著者が大正七八年當時に於ける好景氣時代から、次第に投機熱の勃興するに至つた狀況を叙述すること、甚だ詳密であつて、政府、銀行、一般世間共に浮ツ調子に驅られて、所謂空景氣を誘導したことに就て、嘆聲を發して居る。然らば當時の日銀總裁であつた著者の如き卒先世間に警告する所ある可き道理であり、又警告の重要手段として、日銀自ら金利を引上げるのが當然の道であつたのに、其際日銀の金利を引上げるや、甚だ緩漫であつて、投機熱勃興當時に於ける中央銀行の金利政策として、其體を成さなかつたことが一般に認められる。現に評者の如き、日本銀行の金利引上に依つて、市場を警戒し、市中銀行をして放漫なる信用の膨脹を慎ましめる必要を論述したこと、一再に止まらなかつたのである。然も斯る忠言は當局者の容るゝ所と爲らず、投機熱勃興の極、大正九年三月の恐慌が誘致され、殊に好景氣時代の放漫政策が大なる禍を及ぼして、反動的な景氣の勢を甚だしからしめた跡の存する以上は、日本銀行の如き大正九年の恐慌、其後の不景氣に對しては、一部の責任を負う可き地位に居ると云へるかも知れない。此點に就て、井上氏が本書第一章に於て

私は其時に意見書を書いて、其筋に出した、(中略)何でも總て緊縮方針を取る、政府は財政の緊縮方針を取り、日本銀行は金利を引上げる。輸出も或る品目のものは停止し、又は制限す可し、總て手の固く限り引縮る方針を採ることにして、此空景氣の非常に上りつゝある所を上らせぬやうにする云ふ方策を施すより外ない、斯う云ふ考でありました。

と述べて居る。即ち井上氏は緊縮警戒を必要とし、政府の財政緊縮と日銀の利上げとを併行せしめる意見であつたようである。然も政府が一向緊縮に力を致さなかつた爲めに、日銀としても金利引上に勉めなかつたし、幾分か行はれた金利引上も効果を奏さなかつた云ふ意味と解される。當時の政府は原内閣の下に、高橋是清氏を藏相として、財政上に、經濟上に放漫を事とし、民間の空景氣を煽揚することを能事として居つた次第であるから、井上氏の日銀總裁としての緊縮意見の如き、政府の顧みる所と爲らなかつたのは論を俟たない。井上氏の右の叙述にして誤まざるものとすれば、

當時の政府は日銀總裁の正當なる意見即ち緊縮と利上とを併行せしめようと云ふ意見を抑止して、空景氣煽揚と云ふ横車を押して、憚らなかつたものであつて、經濟社會攪亂の責は一に政府に繋ると云ふことが井上氏に依つて、裏書されたと斷定されるのである。

然らば次に起る問題は在來の如く日本銀行を制度組織の上に於て、政府に隸屬させ、政府の或る政策を遂行する犠牲たらしめ、日銀當局者が金融調節上に正しき意見を懷抱して居つても、政府に阻止されて、之を行ふを得ざるが如き有様は何としも宜しきを得たものと考へられない、之を改革するには、如何にす可きやと云ふことに爲る。中央銀行若しくは日本銀行に就て、井上氏の述べたる所數千言の多きに及んだが、遂に此一事に觸れなかつたのは、吾人の遺憾とする所である。唯第四章の末尾に於て、

倫敦市中の金融の樞軸は英蘭銀行が握つて居ると言つて宜いのです、倫敦の金融調節は英蘭銀行の總裁が獨り握つて居る。と述べて、政府に對して獨立の地位に居る英蘭銀行を稱揚し、之に續いて

日本銀行の如きも今後は政府も國民も之を見ることをもう少し變へまして、段々あの機關を立派なものにし、國民から尊重される機關にして、同時に世の益を爲すやうにしなければならぬと考へて居る次第であります。

と述べたのは、日本銀行をして政權から獨立せしめるの必要を著者自ら告白したものであるまいか、私は此點に就て、著者の忌憚なき説明を得ることを欲する。

著者が物價と通貨との關係に就き、正しき見解を持し、殊に信用通貨の併用を承認し、我國民間銀行の不始末を痛嘆し、殊に銀行が富豪や事業家の金融機關に供されて、其基礎を危うする弊を指摘した諸點又今日を以つて、日本銀行の保證準備制限を擴張する時機に非ずと斷定したことは、吾人の贊成を惜まない所である。

外國爲替并に金輸出解禁問題に就て、日銀當局者として、財政當局者として、深き關係を有する著者は如何なる説明を試みて居るか、此一事は本書中最も興味ある部分である。第五章に於て著者は震災直後の爲替相場を叙し、

地震の當時は四十九弗の相場でありましたが、それが十二年の十二月の末には四十八弗に下りました。それから十三年に行きまして四十七弗半から、四十六弗、四十五弗、四十四弗に下つて、四月には結局四十弗まで下つたのであります、即ち丁度四箇月の間に七弗許り相場が下りました

と事もなげに説明して居るが、元來震災直後に於ては、政府の正貨拂下方針には何等の變更が加へられず、寧ろ其拂下を自由にして、一方に對米爲替相場を四十九弗半に維持し、震災復興に必要な材料の輸入に便宜を與へるのが著者を藏相とする大藏省の爲替政策であつて、此方針は大正十二年十一月まで、繼續されたのである。然るに當時輸入超過の増加に加ふるに、貿易外の貸借亦著しく我國に不利と爲るに及んで、政府は右の建値を維持する能はずとして、之を引下げた一方に、十二月に至るや、全然正貨の拂下を中止するに至つた。此一事が爲替低落、爲替市場混亂を惹起す有力なる原因と爲つたことは、争う可からざる事實であつて、當時の財政當局者は何故に急遽斯る方針に出たものであるか、當時世人の異様に感ずる所であつた。而して斯る方針の變更を行つた當局者は井上氏であつたと思へば、其井上氏自ら今日自由の地位に立つて震災直後の爲替相場を論ずる場合には、一言の此所に及ばなければならぬ道理であるのに、遂に之を見るを得なかつたのは、吾人の物足らぬ感を懷く所である。著者が金輸出の即時解禁論に反對して居るのは、私も同説であるが、然らば如何にして解禁の行はれ得る状態を作り出すかと云ふ點に就ては、唯貿易の改善に依つて爲替相場の、ミント、パーに達するを待つと云ふのでは、甚だしき無策ではあるまいか、井上

氏の議論としては、是れ亦吾人の物足らずとする所である。

以上は評者が本書を通讀した際に心付いた點の或るものに就て、私見を述べたものである。要するに本書は著者の實歴に基く記述ある爲めに、學者の机上に於ける研究に見出す可からざる一種の感興を讀者に與へ、一讀能く既往數年間の經濟的狀態に對して、活きた知識を收めしめる効果の大なることが認められる。而して著者は本書の諸處に於て、學理學說に通せざることを斷つて居るが、吾人の見る所を以つてすれば、本書の専門學術的產物でないことは勿論であるとしても、著者が通貨金融等に對して、正確なる學問上の知識を藏めて居ることは、編中到處に認められる。我國の實際家にして續々井上氏の如き業績に従つたならば、學問と實際との調和に資するもの大なるを得るであらう。

ジェームス・ボナー博士の「マルサスと

其の事業」増訂版

高橋 誠一郎

Philosophy and Political Economy. の著者として最も熟く我が經濟學界に知らるゝ法學博士 James Bonar 氏の好著 Malthus and his Work. の出版せられたるは一千八百八十五年のことであつた。本書は人口論に非ずして、人口論に関する Malthus に就いての敘述である。従つて其の第一編は Malthus 著「人口論」の山來來歴及び内容を取扱ひ、第二編は人口論との關係に於て其の經濟理論

を、第三編は其の倫理學及び政治哲學を紹介し、第四編は「人口論」に對する批評を論評して、其の學說が猶ほ如何なる程度まで有價値のものたるかを決定せんとし、最後の第五編は Malthus の生涯を説いて、讀者をして彼れの人物と其の事業とを聯想するに資せしめんとしてゐる。本書中に於ける「Adam Smith は總べての人稱揚して、而も何人も讀まざる一書を殘し、Malthus は何人も讀まざる、萬人誹謗する一書を殘せり」云々の章句の如き、幾度か我が國の先輩諸學者によつて引用せられたる所である。(cf. *ibid.*, p. 3.)

而も此の書は數年に互つて絶版を爲り、學界の後進に多大なる不便を與へて居つたが、昨一千九百二十四年、即ち初版刊行の後、三十九年にして其の増訂再版を見るに至つた。新刊は若干の註記を添加し、舊版の顯著なる誤謬を訂正し、Malthus の肖像を掲げ、第五編の傳記を擴大してゐる。Malthus の肖像を掲げたる書は Guillaumin の Dictionnaire de l'économie politique, 1853, II. に於ける Joseph Garnier の彼れに關する項目、Malthus, Essai sur le principe de population, publié par G. de Molinari—Petite Bibliothèque Économique, 1889. 及び Dr. Drysdale の Life of Malthus, 1889. であるが、Bonar 博士は John Linnell が一千八百三十三年(即ち Malthus 逝去の前年)油を以て寫生し、自ら彫刻せる版畫を此の書の口繪として掲げてゐる。颯爽たる老儒の英姿は生けるが如くに吾人に迫るものがある。

Bonar 氏が初め Malthus 傳を草するに當つて依據したるものは Malthus の終生の親友 Chichester の僧正 Otter が Malthus の死後、一千八百三十六年に、Pickering によつて出版せられたる其の Political Economy 第二版の卷頭に附せる Memoir of Robert Malthus. 並びに Haileybury なる東印度校の同僚 William Empson 教授が一千八百三十七年一月の Edinburgh Review. 誌第百三十號に掲